

## 韓国研修旅行から得たもの

信州大学大学院 2年 齋藤有紀恵

大学院 1年 李暻洙

学部 4年 石田舞子・於本七瀬・城間友美・

中野真樹・前澤美樹

学部 3年 平野涼子・三間美奈子

学部 2年 門脇恵利子・向出真理子・矢嶋直子

(2001年 11月 14日執筆・所属は当時)

### 韓国研修旅行を終えて

#### 信州大学大学院人文科学研究科 2年 齋藤有紀恵 (言語文化専攻)

訪問前私は少し緊張していた。歴史教科書問題、靖国神社参拝問題など日韓を取り巻く環境の変化に必要以上に反応し、前回の訪問で近く感じられるようになった韓国が少し遠くなった気がしていた。しかし空港で温かい歓迎を受けた時その不安は消え、滞在していた1週間はとても充実したものとなった。カトリック大学校との交流の中で様々なことを経験し、学び、得ることができたと思う。以下、今回の訪問で得たことを日本語教育と交流という2つの点から述べたいと思う。

まず日本語教育についてだが、私は韓国の日本語教育を実感的に理解することを目指していた。特に日本語学習の動機・背景・今後の展望についてできるだけ多くの人と話したいと考えていた。カトリック大学の学生達はとても積極的に初日から多くの学生と話をすることができた。しかし初対面で突然このような質問を投げかけても相手は困惑してしまう。交流を進める中で「誰に、何を、どんな日本語で聞くか」を慎重に判断しながら質問するよう心がけ、できるだけ自然な会話の流れの中で、相手が答えやすい環境を作りながら話すことを課題とした。この点でカトリック大学校の先生方と学生との会話を日常的に聞くことができたのは幸いであった。先生方は授業中のみならず普段の会話においても平明な日本語で話されており、それはとても自然であった。大勢の学生を前にしたスピーチでは誰もが理解できる日本語で話されていた。場面や話している相手に合わせた発話をいかに自然に形成できるか。この意識を持ち、さらに誠意を持って接した時に円滑なコミュニケーションがとれるのである。日本語学習の動機についてはそれほど多くの人に話を聞くことはできなかったが、自分自身の発話や態度を反省し、今まで意識しなかった課題を発見するに至った。

また韓国語講座受講もとても貴重な経験であった。わずか3時間であったが、初めて学ぶ韓国語を日本ではなく韓国で勉強したことは大変勉強になった。それまで学んできた外国語はテキスト上のもので実際使用の場面は限られていたが、今回の場合教室を出た瞬間実際使用の場面に遭遇する。1から覚えたハングルも少しずつ読めるようになり、簡単なあいさつをしたときに韓国語で返事が返ってくる。わかる、使えるという達成感を日常的に得ることができた。その一方で、初級学習者、非母語話者としての不安も感じた。2時間目の授業から他の受講生との差にあせり、3時間目では先生の話聞く余裕がなくなっていた。大学の外へ出た時には、言語によるコミュニケーションが取れないため一緒にいるカトリック大学の学生だけが頼りであった。意思疎通ができないことの不安感、できることの安心感の両方を持ちあわせていた。この感情は外国語学習者に共通するものであるだろう。常に心にとめておきたい。

次に交流についてだが、前回同様今回もカトリック大学校の皆さんの温かい心遣いに感謝したい。初日の空港への出迎えから始まり、滞在していた1週間常にご配慮をいただいた。本当にありがたい。当初、私の中には交流に対して「何かしてもらってばかりで悪い」という受身的な気持ちが強かったように思う。しかし1週間共に過ごし、カトリック大学校の皆さんの姿を見ているうちにそれは変化していった。睡眠時間を割いてまでこの交流週間のために動いてくれた執行部、食事や普段の交流の中で自分や韓国を伝え、私や日本を知ろうとしてくれた学生達。彼らは私達に対し一生懸命日本語で話し、様々な質問や要望にも真剣に答えてくれた。また、ソウル市内観光の際は私の希望をかなえようと必死になってくれた。彼らとの交流を通して受けた分をどう相手に返すことができるかより具体的に考えるようになり、物だけではない心の交流が大切だと実感した。そして会話や行動一つ一つを心から楽しみ、日本語使用の相手となり、感謝と誠意をもって彼らと行動できるよう心がけた。

交流をするとは何かしてもらうことではなくお互いに理解を深めていくことである。そのことを今回の研修旅行で再認識した。自分の母語・母文化に対する認識を深め伝えると同時に、韓国の母語・母文化への興味が更に広がった。前回もあわせ2回の交流で、韓国をより身近に感じるようになり、知り合うことができた彼らのことをもっと知りたいと思うようになった。とても有意義な1週間であったと思う。

最後に、「韓日国際親善交流週間」を設け、私達を快く受け入れて下さったカトリック大学校の姜錫祐先生、李先生、津崎先生、中野先生、そして我々に貴重な機会を与えて下さった沖先生に感謝申し上げます。先生方の御尽力があつて初めてこの研修旅行、交流週間が実りあるものとなったと実感しております。また、カトリック大学校の皆さんや家族の方々、そして参加した全ての人々のおかげで楽しく有意義な1週間

を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

## 韓国研修旅行を終えて

### 信州大学大学院人文科学研究科 1年 李晳洙（言語文化専攻）

#### 1. 目的

今回の韓国の研修旅行は二つの目的を持って臨んだ。一つは、日本語教育が行われている大学の教育現場を直接見学する機会をもつことであった。もう一つは、日本語を勉強している学習者であれば誰もが一回くらいは考えたことがあると思われる日本留学について、どのような考えを持っているのか話し合う機会をもつことであった。詳しく言えば、韓国の研修旅行を通じて韓国の日本語関連学科ではどのような日本語教育が行われているのか、また、学習者は日本語または日本という国をどのように考えているのかなどについて観察と質問で把握することにした。自分が大学教育を受けていた当時となりがどのように変化したか、また教育環境は改善されているかどうかなども見てみたかった。そして、日本留学を希望している学生たちには留学の先輩として自分の経験を含めて色々有益な情報を詳しく提供しようとした。

#### 2. 韓国のカトリック大学校へ

一年半ぶりの帰国であった。今回の研修旅行は馴染みの金浦国際空港でなく仁川国際空港からの入国であった。そこから一週間の日程がはじまった。空港ではカトリック大学校の先生の方々や学生たちの皆さんに歓迎されてうれしかった。特に、姜先生の上手い運転のお陰で晩秋の山野を吟味することができた。運転席が左にあり車が日本と反対側に走っていることが瞬間的におかしく感じられたがすぐ慣れてきた。

カトリック大学校は韓国にいたときからその名前は聞いたことがあるため覚えているが、行ったことはなかった。キャンパスはソウルにあると覚えていたのに富川にキャンパスがあつて、不思議に思った。後で学生に聞いて見たところ、幾つかのキャンパスがありその一つが富川にあるということであった。カトリック大学校は研修院というところ以外にはほぼほかの大学と似ていた。韓国には校内にこのような立派な施設があるところはあまりないようである。男性という理由で広くて立派な部屋一つを個人用としていただいて恐縮であった。

#### 3. 見学

##### 3.1 授業見学

津崎先生の授業時間に行われたミニドラマは非常に印象的であった。内容そのものが新鮮であつて参加した学生たちの演技もすばらしかった。そこまで上達するためには数十時間の練習や数多くの試行錯誤があつたと思われる。単純に日本語を覚えるこ

とではなく、登場人物の性格やストーリーの流れ、場面の把握などができていなければ、あのようなすばらしい演出はぜったいできないだろう。そういう意味で評価されるのに十分な授業だったという気がした。

### 3.2 韓国語学習体験

カトリック大学の4年生が指導する韓国語講座に参加させていただき、たいへん勉強になった。韓国人が韓国語の学習体験するということが変に思われるかも知れないが、人の教え方を見ることも大事な勉強だと思い躊躇なく韓国語講座に参加させていただいた。あいさつ言葉くらいのことしか話せない外国人に韓国語を教えることはあまり易しくことではない。しかし、鄭先生の分かりやすい説明で信州大学生たちの韓国語の発音はだんだんよくなった。個人夫々の発音を聞きながら訂正したり一緒に発音したりする鄭先生の易しい授業が印象的であった。何よりもハングルを覚えようとした信州大学生たちの熱意が熱く感じられた授業だったと思う。鄭先生に心から御礼を申し上げます。

### 3.3 日本語のスピーチ大会

日本語のスピーチ大会に参加した16名の学生全員が本当に頑張ったと思う。参加者の一人であった執行部のAさんは徹夜したような顔付きで当日の朝までスピーチの原稿を読んでいた。その姿から昨年末の自分のことが思い出された。ちょうど一年前、ロータリークラブ主催で行われた外国人留学生のスピーチコンテストに参加したことがあった。当時、チューターの斎藤さんに原稿をみていただきながら数日前から数十回を繰り返して練習した。前日による遅くまで練習していた自分がまさにあのAさんの姿であった。私は審査委員ではなかったが、自分なりの観点からスピーチに耳を傾けた。よく聞いていたら、緊張のせいだったのか、ある発表者は所属と名前を言うことも忘れたまま発表したこともあった。ロータリークラブでの発表のとき自分がそうだったかもしれない。今回のスピーチは学年のレベルの差はあったものの、低学年は低学年なりに、高学年は高学年なりの日本語で素晴らしい自己表現ができたと思う。入賞した参加者には祝賀の拍手を、入賞できなかった人には激励の拍手を送りたいと思う。経験者は言えるのではないか、その喜びを！そして、その悔しさを！

## 4 おわりに

今回の韓国研修旅行の反省会で私は「わが国の韓国からわが家の松本に無事に帰ってきて非常にうれしい」と皆さんに御礼を申し上げた。このあいさつには色々な意味があるが、何よりも冷却された日・韓関係により政府機関はもちろん民間団体との交流さえ断絶された厳しい状況やテロの恐れがあった時点で、韓国研修旅行が無事に終わって大変うれしかった。今回は、信州大学の韓国人留学生として前で言及した二つ

の目標を持って研修旅行に臨んだが、目標以上の成果があったと思う。

反面、惜しいところもあった。一週間のスケジュールがハードであることは十分分かるが、一回くらいは日・韓親善スポーツ交流会があってもよさそうな感じがした。スポーツ交流会を通じて親睦を図ると共に心身のストレスも解消されれば、異文化間のコミュニケーションがもっと上手くなるに間違いないからである。

終わりにあたり、このような貴重な機会を与えてくださった沖先生をはじめ、カトリック大学校の先生方々、大学関係者の皆さんにも心から御礼を申し上げます。そしてカトリック大学校学生の皆さん、特に執行部の皆さんには心から感謝の気持ちを申し上げます。信州大学の日本語教育学の学友とトリック大学校の日本語日本文化の学友との友情が益々深まることをお祈りいたします。ありがとうございました。

## 韓国研修旅行を終えて

### 信州大学人文学部 4年 石田舞子（日本語教育学専攻）

#### 1. はじめに

今回の研修旅行は、沖研究室にとっては2回目であるが、私自身にとっては初めての韓国訪問となった。訪問先のカトリック大学校では、日本語教育の実習をさせていただくことになっていたの、何ヶ月も前からそのことで頭がいっぱいだった。自然、最大の目標は実習を成功させること、となっていた。もう一つの目標は、自分とは異なった文化的背景を持つ人々と接触できるよい機会なので、積極的に話をし、視野を広げるということであった。

一つ目の目標については、もう一つのレポートで詳しく述べたい。二つ目の目標についてだが、はたして自分の視野が広がったかどうかは、正直なところ、はっきりしない。しかし、一週間の研修で経験したさまざまな出来事から得た物は大きいと思っている。時間の流れに沿って一つ一つの出来事について述べたいところだが、紙幅の関係上、そのうち特に印象に残っている二つを取りあげて感想を述べていきたい。

#### 2. スピーチコンテスト

研修旅行2日目にカトリック大の学生たちによる日本語スピーチコンテストが行われた。私も、五人の日本人審査員の一人として参加させていただいた。

学生たちが真剣に発表する姿を見ていると、全員に一位をあげたいという気持ちになったが、審査をする以上、順位をつけなければならない。表現の豊かさ、発音の自然さ、内容の趣深さなどを基準にして点数をつけていった。短時間で行わなければならないため、私にとって非常に難しい作業であった。審査員で話し合って順位を決定するのも時間がかかった。

コンテストが終わった後で思ったのだが、点数をつけて審査をするというのも評価の一つである。評価は日本語教師にとり大切な活動だと知ってはいたが、授業の計画や実践ほどには注目していなかった。しかし、審査員として評価する立場になってみてその難しさを知り、授業の計画と同じくらい、よくよく考えた上で行わなければならない活動ではないかと感じた。

### 3. 市内観光・ホームステイ

研修期間のちょうど真ん中である 10 月 31 日にソウル市内観光、そしてホームステイが行われた。ホームステイはそれぞれのパートナーの家でさせてもらえることになっていた。

市内観光は、私と私のパートナーのチェ・ユンナさんと、於本七瀬さんとそのパートナーのキム・ミョンジンさんの四人で、ゆっくりと回った。買い物をしたり、お茶を飲みながら話していると、日本人、韓国人という差より、同世代の友達という一体感を強く感じた。韓国を訪れるまでは、話があうのかどうかといった心配もしていたが、それは無駄な不安だったといえる。ファッションのこと、好きな音楽のことといった若者文化の話から、日本語と韓国語の違いの話まで、いろいろ話すことができた。

ユンナさんは、話の途中で聞いたことがない言葉が出ると、必ずメモをとり、どういう意味か私に質問をした。その姿を見て、外国語を学ぶ時には、その言語に対して食欲であることが大切だと思った。

ホームステイはたった一晚ではあったが、貴重な体験であった。韓国の人々、特に我々の両親や祖父母の年代の人々にとって、日本人はあまりよいイメージがないのではないかと思っていたが、ユンナさんの御両親はそのような様子をまったく見せず、私を温かく迎えてくださった。お土産を紹介したり、持っていった写真を見せながらいろいろお話することができて本当に楽しかった。お二人は私に「今回の訪問で韓国に良い印象を持ってくれたら嬉しい。また韓国を訪れる時には、うちに来てください。」という趣旨のお言葉をくださった。この言葉を聞いて、感謝の気持ちが湧き起こった。その気持ちをあらわすために、私はこれから何をすればよいのだろうか。それを考えることが私の課題である。まずは、韓国についてもっと知り、韓国語も学びたいと今は考えている。

### 4. 来年に向けて

カトリック大学校と信州大学の交流はこれで終わりではない。来年、再来年と続いていく。交流が途切れないようにするためにも、我々は何をすべきか考えなければならない。

事務的なことをいうと、連絡をきちんと取り合うことが大切である。今は電子メー

ルが使えるので、ずいぶんと楽になったが、文字だけのやりとりなので、多少の誤解や間違いが生じることもあるだろう。その間違いがあとで大事とならないよう注意しなければならない。何が決定していることで、何がはっきりしていないのか。現状認識を連絡係だけでなく、訪問団全員が常に把握しているという状態が理想的であろう。

公式な連絡だけでなく、友人としてメールをやりとりし続けることも大切である。個人と個人のつながりが深まることで全体の交流もより活発になるのではないだろうか。

#### 5. おわりに

研修旅行中、カトリック大の先生方や学生たち、ホームステイ先の御両親など、たくさんの人々と話す機会があった。積極的に話かけることができたのには満足しているが、ほとんどの状況において日本語で話していたために、異文化間交流という意識が薄くなってしまった。それは、周囲が日本語で話してくれることに私が甘えていたからである。また、日韓両国間の歴史認識の問題についても、自分なりの考えはまとめていたものの、自分から言い出すのが怖く、結局話し合うことはなかった。しかし、このような問題から目をそむけてはいけいない。お互いに理解を深め、真の友人となるためにはいつか語りあわなければならないことだと思う。そのために勉強するのはもちろんのこと、忘れてはならないのは相手の気持ちを思いやることである。相手の気持ちを完全に理解することは不可能だが、思いやるということは誰にでもできる。あとは、その思いやりの気持ちをどう表すかということである。このことは常に心に留めておこうと思う。

最後に、姜先生をはじめ、お世話になった諸先生方、そして学生の皆さんにこの場を借りてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

### 再び韓国を訪れて

#### 信州大学人文学部4年 於本七瀬（日本語教育学専攻）

今回の、韓国カトリック大学校への訪問は昨年の3月に続いて2回目であった。前回と同様に、姜先生をはじめとするカトリック大学校の先生方、学生の皆様の温かな歓迎を受けて大変感動してしまった。空港から車で移動していたときに、道路の標識にしても、空気にしても日本と大きく変わらない風景を見て、本当に別の国に来たのかと疑ってしまった。気温も、松本より暖かいくらいでとても心地よかった。いつか見た記憶のある景色を眺めながら、実にリラックスしている自分に気がついた。そしてそんな気持ちの良い状態は1週間変わる事はなく、毎日充実した生活を送ることが出来た。

今回の訪問では滞在期間が長かった為にそれだけカトリック大学校の学生と接する時間が多く、沢山話をする事が出来たのが嬉しいことであった。毎朝学生の方に連れられて、朝食は学食でとったり、大きな図書館の中や、留学生の為の寮内を見学させていただいたり、韓国の大学生の生活を見せていただけたことがとても新鮮で良かった。これも、大学の中にある研修院で宿泊させていただけたおかげだと思っている。図書館の中ははとても広く、蔵書やパソコンなどの設備も充実していた。留学生の寮も清潔で何より学校の敷地内にありインターネットやメールも出来るようにパソコン室もあるなど、気持ちよく勉強するのに最も適した素晴らしい環境であったと思う。

前回の訪問の時と同じく、信州大学の学生一人に対してカトリック大学校の学生一人がパートナーとして付いてくれた。前回との大きな違いは、そのパートナーの自宅にはホームステイするという機会が与えられたことだった。韓国の同年代の人々と接触すること自体とても重要な事であり、お互いの未来にとってとても大きな意味のあることだと考えて臨んだ今回の韓国訪問であったが、まさか韓国の家庭にまで入れるチャンスが巡ってくるとは思っていなかった。私のパートナーになってくれたのは、偶然にも前回のパートナーと親しくて、私とも仲良くなったキム・ミョンジンという方であった。彼女とは嬉しい再会を果たしただけでなく、今回のパートナーとして更に親睦を深めることとなったのだ。ミョンジンは、去年1年間、私の前回のパートナーと共に日本に語学留学した経験があり、日本語がかなり上達していて驚かされた。日本のファッションや、若者の流行に対してとても興味がある様子だった。彼女の日本語能力がかなり高かったこともあって、私たちの話題は、日本語と韓国語の指示詞の相違についてや、擬態語擬音語の表現などにまで広がって行って、充実した会話が出来た。また、彼女のご家族にお会いして、温かく歓迎していただいたことにも胸がいっぱいになった。ただ、時間が短すぎて、十分お話が出来なかったのは心残りであった。しかし、お母様が、「今度は妹さんも一緒に、また必ずいらっしゃい。あかすりもしてあげるし、私とゆっくりとサウナに入ろう。今回出してあげられなかった私の手料理も食べてもらいたい。」とおっしゃっていただけた事が忘れられない。もっと韓国語を勉強して、少しでも相手の言語でコミュニケーションが取れるようになって、必ずまたお礼も兼ねて訪れたいと思う。

2回目の韓国訪問の私にとっての大きな目的のひとつとして「再会」があった。私が2年生の時に出会った学生は、私と同じように4年生になっている方が多かった。みんな落ち着いた様子で、とても頼もしい印象を受けた。彼女たちは、卒業論文の提出が迫っていてとても忙しく、残念ながらほとんど顔をあわせることがなかった。し

かし、忙しい時間を割いてわざわざ宿泊施設にまで足を運んでくれたり、空港にまで見送りに来てくれるなどしてくれて、本当に感激した。

前回の訪問の際、私は初めての韓国ということからくる緊張と、食べ物の変化という理由からか、体調を崩してしまった事があった。正直に言うと、何よりも訪問期間中の体調に不安を抱いていた。だが、実際に韓国へ訪れてみると何でも美味しく戴けたし、そんな心配をしていたことも忘れてしまうほど調子が良かった。滞在させていただいた1週間、とてもリラックスして気持ちよく生活できたのは私たちを歓迎する為に本当に一生懸命になって下さったカトリック大学校の皆様のおかげである。心からお礼を申し上げたい。前回と同様今回の訪問の際も、日本からのお土産として「松本手鞠」を用意していきとても喜んでいただいた。私達日本の信州大学と、韓国のカトリック大学校は正式に姉妹校として結ばれた。毎年毎年、模様の違う「松本手鞠」が一つ一つカトリック大学校に飾られていくのだろうと思う。温かいこの関係が、末永く続いていくことを心から願っている。

## 韓国研修旅行記

### 信州大学人文学部 4 年 城間友美（日本語教育学専攻）

2001年10月28日から11月3日にかけての一週間、沖裕子教官とともに我々日本語教育学専攻学生は韓国・カトリック大学校を訪問した。総勢13名の研修旅行である。昨年に引き続き、韓国・カトリック大学校訪問は二回目であるが、今回は韓日国際交流週間で、特に四年生は実際の授業で日本語教育実習をさせていただくというまたとない機会を得ることができた。

旅行の前には十分に体を休めておくべきだったが、今回の旅行では学生代表という緊張もあってか寝不足のままバスに乗り込み名古屋空港を目指した。約三時間後、名古屋空港に到着。ASIANA OZ121便に乗り込むと、とたんにまわりは韓国モードへと切り替わる。その空気を感じ、「また韓国にいけるんだ！」と胸が高鳴った。そしてあっという間にソウル仁川国際空港に到着するとすぐ、ゲートの向こうに懐かしい姜先生と中野先生のお顔を拝見することができた。今年は、李先生と学生代表の柳さんと李さんも歓迎の幕を持って迎えてくださった。乗り物酔いで気分が悪かった私の荷物を学生代表の二人がそっと持ってくれたことに、到着そうそう胸が熱くなった。

夕方にはカトリック大学校・研修院に到着した。以前と変わらず美しい学校である。そして夕食は先生方、学生の皆さんと共に焼肉を食べた。「韓国では食文化を存分に満喫しよう！」と密かに意気込んでいたが、あいにく乗り物酔いで存分に食べることができなかった。しかし、翌朝には張り切って学生の皆さんと大学内食堂で朝食をいた

だいた。そこで飲んだトマトジュースの美味なこと！食塩入りトマトジュースしか知らない私にとって韓国のフルーティなトマトジュースは実に新鮮であった。

国際交流課訪問では、郭国際交流処長が信大生一人一人に記念品を手渡してくださいました。周りを見渡すとカトリック大学校が交流する世界各国の大学紹介がある。その中から信州大学の名をみつけた瞬間、今回の訪問に参加できたことを誇らしく思う気持ちと嬉しさが湧き上がってきた。

メインイベントである日本語スピーチ大会での16名の発表は、一人一人のスピーチすべてが心に響いてくるものであった。津崎先生ご指導によるミニドラマ発表会も含めて、カトリック大学校の日本語・日本文化専攻の皆さんの熱心な勉強ぶりがうかがえた。その後の歓迎会ではじめてホームステイパートナーが発表された。パートナーの李恩周さんは副専攻で日本語を学ぶとても素敵の人だった。

交流週間では、韓国語講座も開催され、カトリック大学校四年生の鄭さん、沈さんのお二人が丁寧に韓国語会話を教えてくださった。ここで覚えた挨拶をホームステイファミリーの前で早速披露するととても喜ばれ、私自身も大満足であった。

パートナーである李恩周さんとの自由行動は、特に思い出に残っている。私が「韓国の女の子のストレートヘアは素敵だね」と言うと、彼女は梨大でも有名な美容室に連れて行きそして美容師の方に私が日本人であることを伝え受付をしてくれた。その後私は恩周と離れ、いきなり日本語の通じない世界へと足を踏み入れてしまった。椅子の上で身動きがとれない私は不安で仕方がない。周りにはこんなに人がいるのに孤独感だけが私を支配している。言葉が通じないとはこんなにも不安なものだったのか…。ふと私は恩周のことを思った。先日のスピーチ大会で彼女は、慣れない日本で最初はずっと孤独だったが不安だらけの自分を一人の日本人が声をかけて救ってくれたと発表していた。結局、私の韓国美容室初体験は数時間で終わり、恩周がすぐ近くに来てくれたのでその孤独感もすぐに消えたのだが、異文化に飛び込むのは思っていた以上に大変だ。恩周を含め一人で外国に留学する人の強さに感心した。そしてその土地で心を許せる相手がいるということがどんなに心強く、安心できるかということをもって経験した。最後に店の人が身振りつきで気に入ったかというようなことを聞いてきたときに、「ネー！」と答えると互いに笑顔がこぼれた。ここへきてはじめて私は美容師さんとコミュニケーションがとれたのだ。最後のほんの一瞬であったが、とても嬉しかった。

恩周とは電車の中でも道中でも喫茶店でも途切れることなく話し続けた。そこには韓国・日本という国を飛び越えた、同世代の友人としての二人が存在していたように思う。今回の旅行では、日本語教育の現場を実際にみるということが大きな目的であ

り、実際に素晴らしい経験することができたが、それに加えて人と人との出会い、つながりという更に大きいものを得たように思う。再会した先生方と友人達、初めて会った先生方と友人達。「この人たちにまた会いたい、また韓国にきたい」という気持ちが前回よりもさらに強くなった。今度は同じような気持ちを是非カトリック大学校の学生の皆さんにも信州へきて味わっていただきたい。お互いに「出会ってよかった、また会いたい」と思える、お互いを高めあえるような交流が今後も末永く続くことを心から願う。

最後に、カトリック大学校と信州大学の交流という素晴らしい計画を進めてくださった姜先生、「リラックスして下さい！」と常に私たちを気遣ってくださった李先生、授業面と生活面での適切なアドバイスをくださった津崎先生、全てにおいてサポートしてくださった中野先生、柳さん・李さんを代表に研修院に泊り込んでお世話してくれた二年生・三年生の皆さん、忙しい中駆けつけてくれた四年生、韓国で関わった全ての人達に感謝の気持ちを込めて御礼申し上げたいと思います。またこのような国際交流の機会を与えてくださった沖先生、同行していただいた院生の斎藤さん、李さんのお二方、学部生メンバー全員にも御礼申し上げます。

## 韓国実習を終えて

### 信州大学人文学部 4年 中野真樹（日本語教育学専攻）

去年の春、もう2年ほど前になるが、私は先輩たちにくっつくようにして「韓国文化視察旅行」に参加した。私にとって初めての韓国旅行であった。3泊4日という短い旅ではあったが、韓国の空気や文化に触れ、いろいろな人と話をしながら多くのことを学ぶことができた。中でも、カトリック大学校の学生と一緒に独立記念館を見学したことは、私に様々な感情を呼び起こした。韓国併合という歴史的事実を、韓国人の視点から捉えることができよかつたと思う反面、多くの戸惑いや気まずさも感じた。短い時間の中、異文化の土地で、絶え間なく入ってくる多くの情報と自分の内側から溢れ出てくる感情を整理するのは、なかなか大変だった。もし、この旅が一人旅であったら、また、日本人だけの旅であったら、心や頭がパンクしてしまったかもしれない。しかし、そうではなかった。話を聞いてくれる仲間がいた。同じ専攻の先輩や友人、そしてカトリック大学校の皆さんがいつもそばにいてくれたのだった。この旅で最も印象深く胸の奥に残ったのは、カトリック大学校の学生の私達に対する誠意と心遣いだった。

あれから約2年が経ち、再び韓国へ行く機会を得た。カトリック大学校の皆さんと、今度は「韓日国際学術交流週間」という名で一週間の交流をすることになったのだ。

今回の交流では、カトリック大学校の日本語日本文化専攻の学生による日本語スピーチコンテストや、私たち信州大学生による日本語教育実習、日本語の授業見学、また、韓国語講座などが予定されていた。日本語教育実習に関しては、大変ありがたい機会をいただいたと思いながらも、うまく授業ができるのだろうかという不安はやはりあった。この実習へ向けて、春から少しずつ準備を進めてきたとはいえ、絶対的な経験不足と自分に対する自信のなさから、不安は実習直前までぬぐいきれなかった。しかし、そんな不安を抱えながらも、前回の旅でお世話になったカトリック大学校の皆さんにまた会える、また交流ができると思うと嬉しく、この旅がとても楽しみに思えてくるのだった。先にも述べたが、前回の旅行で受けたカトリック大学校の皆さんの誠意は本当に忘れがたいものだった。そしていつのまにか、今度は私がカトリック大学校の皆さんに「お返し」をするんだ、と思うようになっていた。「お返し」といっても、物をあげることだけではないだろう。日本語を勉強している学生にとって、私たちの訪問はネイティブの日本語をたくさん聞ける格好の機会となる。だから、彼らと積極的に交わり、たくさん話をしよう。それが、少しでもカトリック大学校の皆さんへの「お返し」となればと考えていた。

そんな思いを胸に抱きながら出発した。名古屋空港までのバスの中や空港での待ち時間、飛行機の中でも私は実習の授業案とにらめっこしていた。正確には、目をつぶってイメージトレーニングをしていたのだが、いつのまにか眠りに落ちていたこともあった。余裕のもてない自分を情けないと思いながらも、実習のことが頭から離れなかった。そうこうしているうちに仁川空港に着いた。名古屋空港から約2時間、あつという間のフライトだった。空港ではカトリック大学校の姜先生、李先生、中野先生、また、学生代表のリュさんと副代表のイさんが迎えに来てくださっていた。前回に引き続き、「カトリック大学へようこそ」という立派な幕を持っての大歓迎ぶりに、早くも感動してしまった。韓国は、思ったよりも暖かく、なんとなくほっとした。実は、人一倍寒いのが苦手なのだ。そして、車に乗せてもらうこと約1時間、いよいよカトリック大学校に到着した。その日の夕食会では、焼き肉や冷麺をごちそうになった。何かを始める時の緊張と不安、そして同じくらいの期待が入り混じった不思議な気持ちで初日を過ごした。

それからの一週間は、忙しくも充実した日々を過ごした。2日目の日本語スピーチコンテストでは、初対面の学生なのに、その内容に共感を覚えたり、彼女たちの日常が感じられたりして、彼女たちをととても身近に感じる事ができた。おかげで交流をするにあたってのいいスタートがきれたように思う。さらに、3日間に分けて行われた韓国語講座では、ほぼ初心者私たちのためにとても分かりやすく、そして楽しい授業をして

いただいた。そこで教わった挨拶表現や、単語をすぐに実際使用できるという環境が、韓国語に興味をもたせ、もっと学びたいという意欲をかきたててくれた。また、日本語の授業を見学させていただいたことも、本当に貴重な経験であった。特に、寸劇を取り入れた授業には大変興味をもった。非現実的かつ誰もが知っているような架空の人物を役として与え、それになりきることで中途半端な恥ずかしさを取り除き、その上で様々な日本語の表現を学習する。上級の学習者がぶち当たる日本語の壁を、このような工夫で乗り越えさせようとする実践例に触れることができ、大変勉強になった。

そして5日目、6日目には、日本語教育実習をさせていただいた。授業を始める直前までは緊張と不安でいっぱいだったが、いざ授業を始めてみると、いつのまにか開き直って話をしている自分がいた。それでも、準備不足や勉強不足から、学習者の質問に上手く答えられなかったり、段取りの悪さで無駄な間を作ってしまったりと、多くの失敗をした。学習者の皆さんの温かいまなざしや、授業を見守ってくださっていた先生方のフォローに助けられながら、なんとか無事に終了した。授業をするまでの不安と緊張は、授業が進むにつれ不思議な興奮に、そして終わった後は安堵感と爽快感に変わっていた。

交流期間中は、ほとんどカトリック大学校の研修院で寝泊りさせていただいた。夜はオンドルが効いて温かかった。研修院では、カトリック大学校の皆さんの心配りをありがたく受けながら、本当に気持ちよく生活させていただいた。そんな中、交流週間4日目に、一日だけパートナーの家にホームステイをする機会をいただいた。ホームステイパートナーと、一日たっぷりソウル市内を観光した後、お宅へお邪魔した。実習の時と同じくらいの緊張と不安を抱えていた私を、ご家族の方は自然な笑顔で受け入れてくださった。たどたどしい韓国語で挨拶と自己紹介をし、松本から持ってきたおみやげ（松本手まり）をお父さんに手渡すと、すぐにテレビの上に飾ってくださった。その後、パートナーの通訳に頼りっぱなしではあったが、お兄さんとお話をする事ができた。韓国人は、仲の良い友人の家では冷蔵庫を勝手に開けるといううわさは本当か、といった質問から、日韓の抱えるモラルの低下問題に至るまで、幅広い話をした。私にとっては日本語を話せない韓国人とたくさん話した初めての経験だった。日本語を話せるパートナーがいなかったら話をする事ができなかったと思うと、ことばを習得することの意義の大きさを実感したとともに、自分が韓国語を話せないことに対してもどかしさを感じた。

今、改めて一週間の交流を振り返ると、「忙しくも充実した日々」は、心の忙しさと心の充実だったのだと思う。実習を無事終えるまで解けなかった緊張と不安。ホームステイをするにあたっての緊張と不安。しかし、それと同じくらい、「楽しい」とか「嬉

しい」という気持ちがあった。それは、何かを知ったり、学んだりすることに対するおもしろさであった。国境や文化を越えてお互いに理解し合えた瞬間への感動と喜びでもあった。そして、ただ一緒に街を歩くだけで、一緒にごはんを食べるだけで、他愛もない話をして笑いあうだけで単純に楽しいと思える瞬間が多々あった。それは、誰かと一緒に何かをする時に感じる、人間の普遍的な感情だろうと思う。私は、前回の交流でカトリック大学校の皆さんからいただいた誠意を、今回違う形で「お返し」しようと思っていた。いろんな学年の学生とたくさん話をするぞ、と意気込んでいた。しかし、実際に皆さんとお会いして同じ時間を過ごすうちに、そんな意気込みなど意識しなくても自然に、「話がしたい」「もっと知りたい」という欲求がわいてくることに気づいた。また、「お返し」は一度に全部返さなくてもいいのではないかと思えるようになった。「交流は、交流期間だけで終わるものではないよね。」これは、前回の交流で私のパートナーだった学生が、今回の交流の最終日に手渡してくれた手紙の中の一文である。お互いに再会を喜び合い、そしてまた別れる瞬間にこの手紙を、この言葉を手渡してくれたのだった。「相手からしてもらったら、すぐに何かお返しをしなくてはいけない」という考えをほぐしてくれる言葉であった。長い交流の中で「返し返され」という関係を続けていくことが大切なかもしれないと教えられた。

日韓関係には、不幸な歴史に由来する様々な問題があることは確かだ。歴史教科書問題や靖国神社参拝問題などである。それらのことに真剣に目を向け、何が問題なのか、解決するためにはどうすればよいかを互いに考え続けていくことはとても大切である。そのような努力を続けながら、一方では今回のような学術交流や、そのほか様々な民間の交流も活発に続けていくことも大切ではないだろうか。人と人が顔を見て話し合い、触れ合うことで得られるものは想像以上に多いのだ。今回、カトリック大学校と信州大学の交流に参加することができて本当に嬉しく思う。最後に、このような交流が実現するまで導いてくださったたくさんの方々に感謝を申し上げたい。

## 韓国研修旅行を終えて

### 信州大学人文学部4年 前澤美樹（日本語教育学専攻）

#### 1. 旅行の目的と意義

この旅行は日本語教育実習という大きな目的があった。今年度前期に本校の留学生センターにお世話になり日本語教育実習を行なった。並行して韓国での実習にむけて自主ゼミを重ね実習案を立ててきた。教壇実習経験ができ、さらに、カトリック大学校の先生方や学生たちに日本語教育の現状をうかがう機会が与えられたことを感謝している。また、韓国人学生、韓国の人々との交流という目的もあった。同年代の韓国

人学生との交流によって刺激をうけたり、お互いの考えを体やことばをおおいに用いてわかりあえたら、という期待に満ちていた。ホームステイや市内観光ではさまざまな韓国人と接する機会があるだろうから、つねに「相互行為」を意識する姿勢を持ち、そのような小さな出会いも大事にできたら、とも思っていた。

## 2. 学生との交流と実習

滞在期間の前半に学生達と交流し、後半に教壇実習があった。前半はスピーチコンテストや授業を見学することができた。そして韓国人パートナーと市内観光・ホームステイがあり、学生達とお互いに馴れ、気分転換をしたところで実習をした。実習についてはここではあまりふれないが、「ハラハラドキドキ」し通しであった。事前にあわてるが多かったり、学生のレベルが思っていたより高かった、等の予想外の事態への対処ができない自分にとっても幻滅したのであった。ただ学生達が好意的に私達を受けとめてくれたことが救いだった。

学生との交流は仁川空港に到着したときから始まった。先生方や学生数人が迎えに来て、車までご用意くださっていた。構内の研修院という宿泊施設に泊まったのだが、期間中隣の部屋には韓国人学生も泊り込んで私達のマネージャーのように動いてくださった。朝早くから夜遅くまで、客の私達をもてなし、くつろがせ、世話をするのを心から喜んで行なってくださり、頭が下がる思いであった。食事のときも必ずリーダーの柳さんをはじめとするスタッフの学生が付き、ともに話す機会がたくさんあった。韓国の街並み、ことば、食べ物、学校、恋愛等々、すべてが異文化で興味深かったため、話題に絶えなかった。彼らは私達のわからないことを日本語で教えるという高い日本語運用能力をもっている学生たちだった。レベルの差はあるとはいえ、臆することなく日本語を話そうとしていたのは全学生に一致することだろう。

実習が第1の目的だと考えていたのだが、学生との日々の交流が私の思い出の大半を占めている。国や文化を超えて交わるとき「ことば」というものはとても便利で、効率的であることを思う。今回「日本語」を通じてコミュニケーションをしたが、ことばが通じるというのはお互いにとっても楽しかった。ではそこまでの運用能力のない学生との交流はどうだったかという、辞書をひき、メモとペンを使い、身振り手振りを加え、お互いに「わかってほしい」「わかりたい」という気持ちがあった。言語伝達の基本的な動機となりうるこの気持ちこそ、「もっと上手になってコミュニケーションできるようにになりたい」という気持ちへとつながるものだろう。最終日、多くの韓国人学生が「もっと日本語をうまく話したいです。」といていたことがとても印象的である。

## 3. 市内観光と日本人のわたし

ソウル市内を日本人学生 3 人韓国人パートナー3 人と歩いた。地下鉄にもバスにも乗り、屋台もファミリーレストランもデパートも体験した。買い物と一緒にすることで物の値段の高い・安いは値段そのものではなくて、割にあっていないかがポイントであることがわかった。日本人が好むものは割高であったが、そのなかでも伝統喫茶（3,500W～4,500Wくらい）は 3 人くちをそろえて「高い！」と言い、さらに私の飲んだ「よもぎ茶」を「おいしくない。」とも言った。それから彼女たちに「これって高い？安い？」と聞いて現地の感覚で買い物をすることを試みた。しかしあまりに私が悩み、ケチるため、パートナーのイ・チースクに「(お金がないようだけど)大丈夫？」と聞かれてしまった。服や香水、アクセサリなどは日本の価格と変わらないが、地下鉄が 700 ウォンほど、タクシーが 2000 ウォンほどで乗れることには驚いた。道理で大学にタクシーが入ってくるわけだ、とタクシーで駅から学校に向かいながら納得したのであった。

パートナーたちのおかげでまるで自分が韓国人になったように自由に動けた。屋台のおばさんもデパートのお姉さんも私達のことを黙っていけば日本人だとはわからない、と言っていたが、私は韓国人と思われてなんだかうれしい気持ちになる自分に気がついた。欧米人からみたら日本人も韓国人も中国人も区別がつかないことはよく聞くが、以前はそれがいやだった。それぞれ言語が異なるように見ためも異なるはずだ、と自分に言い聞かせていたのである。しかし、今、私達は「アジア人」であり、友であり、同じ時間を生きていることを思い、うれしい気持ちになる。交流のうちで数々の温かな思い出が生まれ、このような小さな気持ちの変化もいくつか生まれた。カトリック大学のみなさんのもてなし、接しかた、笑顔、など学ぶことがたくさんあり、こんなに真剣に人のために尽くしたことが最近の私にあっただろうか、と内省し、恥じるばかりであった。自分の生き方にまで踏みこんでくる旅行であった、と言うのは決して大げさではないと思う。当初の目的を果たしつつ、さらにすばらしい友や思い出を与えられたことを心から感謝している。

## 韓国研修旅行を終えて

### 信州大学 3 年 平野涼子（日本語教育学専攻）

仁川空港で到着した乗客を出迎える人々の中に『カトリック大学へようこそ』と大きく書かれた垂幕が見えた。とたんに私は、本当に韓国へ来たんだという気がした。それと同時にこれからカトリック大学校での一週間の不安と期待が膨らんできた。

今回の研修旅行にあたって私は 2 点の目標を自分に対して作っていた。1 点目はカトリック大学校で行われている日本語教育の現場を見てどのような教室運営が行わ

れているのかを自分自身の目で見ること。そして、学生が日本語教育に対して何を求めているのかを探ることである。

2点目は、異文化を一週間思う存分に肌で感じることである。韓国という日本とは異なる文化を持った国で一週間だが生活できる貴重な機会である。私なりに韓国の文化、習慣、人々様々なものに積極的に触れていきたいと思った。

これら2点の目標は、大体自分でも満足できる程度に達成できたと感じている。しかし、期待以上の収穫を今回の研修は私に与えてくれた。それは、カトリック大学の学生向けに開講された講演会に参加できたことである。その講演は、日本の大衆文化の解放についてのものであった。私はこれまで日本の大衆文化の解放について日本人の視点からでしか考えていなかった。しかし、この講演では、日本の大衆文化の解放について初めて韓国側の視点にたった話が聞くことが出来た。無意識のうちに、私は自分の視点から物事を把握しようとしていたのである。また、日本文化の韓国への解放は、同時に韓国の文化も今まで以上に日本へ解放されることが予測される。これは当然のことであるが意外にあまり深くは考えられていないのではないだろうか。

異なる文化を持つもの同士と交流するときには、相手の視点にたった考え方がどれだけ出来るかというのが重要になってくるのではないだろうか。そのためには、まずは相手の文化、習慣などを認め理解しようとする気持ちが必要になってくるだろう。私は、毎日が驚きの連続でそこまでは至らなかったかもしれない。これは、次回への課題としなければいけない。

今回の研修で私はこれらのことを本当に痛感したのである。それは姜先生をはじめとするカトリック大学のみなさんの温かい歓迎からも感じる事が出来た。

今回の研修は私に素晴らしい経験とたくさんの友人を与えてくれた。このような交流がこれからも続いていくことを心から願っている。

## 実り多き韓国1週間

### 信州大学人文学部3年 三間美奈子（日本語教育学専攻）

以前から行きたいと思い続けていた韓国へ、大学間交流という形で実現するとは、自分にとってとても幸運であった。観光で訪れていたら、韓国の人々との触れ合いはそれ程持てないだろうし、家庭にも訪問することはできなかったはずである。今回の韓国訪問を日本語教育という視点と、それ以外の視点から振り返りたい。

#### 話題ニーズは何か

私たち2・3年生は、カトリック大学の学生4～5人と1人ずつ自己紹介をしながら自由に話をする「フリートーキング」の実習をさせていただいた。事前準備とし

て沖先生からは、相手の知りたいことは何かを考えて題材を用意していくようにとの指示があった。なかなかいい考えが浮かばないまま私は、高校時代のクラブ活動で使用した華道のテキストを持っていった。結果から言うと、これは全くの選択ミスであった。フリートーキングを進めていくと、大学の生活や今現在の私たちの身近な話題で盛り上がった。特別なことよりも普通に友達と話すような話題の方が、自分も楽しく、相手も求めているように感じた。また、実習以外のところで話題となったことに、日本への留学事情がある。カトリック大学の学生のみなさんは、日本への短期あるいは長期留学を視野に入れている人が多く、その情報を求められた。自分が持っている知識や知人の留学生を参考に答えたが、十分とはいえなかった。日本における日本語教育の実状の把握も必要なことであると痛切に感じた。

言語を教える教師は、その国や地域の文化の窓口であると考えている。学習者は、教師の話すことばや情報に、かなりの影響を受けていく。日本語教師を目指す者としては、各学習者の求める情報の分析や、その正確な情報の提供も心がけなくてはならない。今回はあまり分析も情報収集もしていかなかったので、反省すべき点である。自分の日本語内省

今回の研修で私が目標としてあげたのが、学習者の心理的な面への配慮である。これは、私個人のトラウマとも言える経験から出た考えである。学習中の言語でコミュニケーションを図るということは、ものすごい集中力を要し、特に初級の人には、ストレスにもなるのではないかと考える。もちろん、そこには喜びもあるのだが、長時間その集中力を保つのは容易ではない。今回のような交流においては、人と人の出会い触れ合いである。日本語母語話者側も相互理解のために、出来る限りの配慮が必要ではないかと思う。初級者には負担を軽くする、上級者には自然な話し方、などレベルにあった発話の配慮をする必要を心がけようとした。実際には、つい難解な言いまわしをしたり、変に意識したりしたが、スピーチコントロールの意識は身に付いた。

1週間という長い間、しかも泊まり込みで私たちの相手をしてくださったカトリック大学校のみなさんは、疲れていても朝の頭のぼんやりしているときも、いつも日本語でにこやかに話しかけ、受け答えをしてくださった。尊敬している。

#### 韓国の食事・街並み・その他

今回、韓国の様々な代表料理を味わうことができ、とてもうれしかった。カトリック大学校のもてなしに感謝するばかりである。日本と韓国の文化は似ているようで、少なくとも料理についてはかなり違うのではないかと思う。素材は大体同じでも味付けや料理法は、別々の道を歩んでいるなあと感じた。私は和食があまり好きではない。韓国の人の中にも辛いものが苦手な人が絶対いるはずだ！と思って、院生のイさんに

聞いてみたが、まずいないだろうとのこと。本当だろうか？信じがたい。

知らない街に行ったら、その街並みをぶらぶら歩くのが私は好きである。今回はあまり自由に歩き回るといった機会はなかったが、市内見学などで見た街並みは、日本に似ているようでやはりどこか違うものを感じた。長野で生まれ育った私には、高層のアパートが並ぶ景色は驚きでもあったが、郊外の畑の風景は長野そのものといえるほどであった。また、家の素材が、レンガや石であるという点も想像とは違っていた。最後に

1997年に私がドイツへ行ったとき、たくさんの韓国の大学生に出合った。その時、韓国の学生が日本の文化に関心が高く、また日本のことをよく知っていることを知った。また、韓国では学校で、外国語習得の選択肢として英語などと並んで日本語を勉強することができるという話を聞いて驚いた。そこで知り合ったドイツ語を選択してきた学生もほとんどが日本語の簡単な知識を持っていた。そこには、経済など現実的な理由があるのかもしれないが、韓国が日本に向けている熱い視線の一方、(当時の)日本はほとんど韓国について無関心であった。私自身も、それまで韓国についてほとんど無知であったことを恥ずかしく思った。

その後、帰国してから私は韓国語を習い始めた。その時の先生が、当時信大人文学部院生の留学生であった。彼女は、日本語と韓国語を熟知しており、教え方も的確であった。彼女から大学や日本語教育学などの話を聞くうちに、編入の二文字が私の前にちらつき、現在に至っているわけである。韓国語レッスンから始まった私の大学生活、そしてカトリック大学校との交流へとつながったことは不思議な縁である。カトリック大学校にも私のように社会人から編入した人や、働きながら勉強している人もいて心強くなった。

韓国での1週間は、とても楽しく充実したものであった。カトリック大学校の先生方、学生のみなさんには心から感謝の意を表したい。そして、この交流が長く続くために、私たちにも何ができるのか考え、実行したい。カトリック大学校、信州大学両校で築き上げていく交流を目指して基盤づくりをしていきたい。

## 韓国研修旅行を終えて

### 信州大学人文学部2年 門脇恵利子(日本語教育学専攻)

10月28日、私は期待半分不安半分の複雑な気持ちで名古屋空港からソウルの仁川空港に飛んだ。この研修旅行が決まってから勉強会として2回ほど集まり、それぞ

れが調べてきた韓国の歴史・文化・生活などについて話し合った。その中では日本人として避けてはいけない、日本の韓国に対する侵略などについても触れられた。彼らは「日本人」に対してどういう感情を持っているのだろう、私はどう接していけばいいのだろう。このことは日本国内にいる間には私自身、結局結論が出ないままであった。そんな気持ちのままやってきた韓国では、やさしく迎えてくださったカトリック大学の皆さんに対して自分をどう出せばいいのかわからずに、始めは戸惑ってばかりいた。何を話したらいいのかわからない、初めの頃は、日本にいるときに目標としていた「心を開いて」ということがなかなかできていなかったように思う。後で気づいたのだが、自分が心を開いていないのに違和感なくうまくいくということなんかありえない話である。自分というものを見せずには相手と近くはなれないということを今回のことで強く実感した。不安だらけであった自己紹介も兼ねたフリーストークも、とても楽しく行うことができた。

韓国訪問で楽しみにしていたことは、生の日本語教育の授業見学と、私たちのために開いてくださった「韓国語講座」である。「韓国語講座」は3回の授業だったのだが、もっとやりたかったという気持ちでいっぱいだった。韓国に来るまで、「こんにちは」ぐらいしか言えなかったが、先生のお蔭で簡単な自己紹介ができるまでになった。ホームステイ先のお父様とお母様にドキドキしながら挨拶したことは一生忘れないだろう。韓国語・ハングルについてはこれからも勉強していきたいと思っている。

日本語教育の授業見学では、海外で日本語が実際どのように教えられているのかを見ることができて、本当に貴重な体験をした。生徒が楽しんで授業をしていることが見ていてもわかる、そんな授業だった。いつか私もそうなりたいと強く思った。

最後にこの一週間いつも感じていたことは、カン先生をはじめとするカトリック大学の先生方や学生の皆さんの心遣いである。この場をかりて心からお礼を申し上げたい。本当にありがとうございました。そしてこのような機会を与えてくださった沖先生、いろんなことで支えて助けてくださった先輩方に心から感謝申し上げます。

## 韓国研修旅行を振り返って

### 信州大学人文学部 2年 向出真理子（日本語教育学専攻）

今回の韓国研修旅行に参加するにあたって、「心を開き、礼をつくして交流する」という最大の目標とともに、私自身の目的を3つ立てた。ひとつは日本語教育の現場をみて日本語教師というものを再認識することである。今まで本やテレビでしか日本語教師をみたことがなかった私にとって、この研修は本当によい機会を与えられたといえる。二つ目はできるだけ韓国語を話すことである。日本語教育の研修であることを

前提にして、去年から始めた韓国語の力を試してみたいと考えた。そして三つ目は食文化を中心に日常の韓国をみることである。これらの目的をもってついに韓国に出発する日をむかえた。

朝まだ外が暗いなか起きて大学の集合場所に向かっても、名古屋空港に着いてもこれから韓国に行くという実感がなかった。空港や機内で韓国語を見たりアナウンスを聞いていてようやくいよいよ、という気持ちになった。それでも飛行機に乗ってわずか2時間弱で仁川空港に着いたときは喜びや期待とともに、一方で韓国に来たんだなあともまだ信じられないでいた。韓国にいる間私には常にこの二つの気持ちがあったが、一週間の中でさまざまなことを見て、そして感じた。

二日目に行われたスピーチコンテストでは、“私の性格”や“私の大学生活”、“夢に対する姿勢”などと題された話を聞いていて、韓国人学生がどのようなことを考えているのかを知ることができた。それは自分と同年代の、共感できる内容がいくつもあった。また話のところどころに、こんな日本語も知っているのか、という言葉や表現があつて驚いた。それは同時に、私はまだ韓国語で今のようなことは言えない、と思わずにはいられないときでもあった。四日目から五日目の午後まで与えられた自由行動では、私とパートナーのヒョンジョン、前澤さん、三間さんとそのパートナーの6人でソウル市内の観光と買い物を楽しんだ。地下鉄に乗ることから始まり、景福宮と国立民俗博物館を見てまわった。国立民俗博物館ではパートナー3人が展示品の一つ一つを説明してくれ、また昼食は海苔巻やチヂミ、キムチなどを持ち寄ってくれていた。久しぶりに遠足のときのような気分で、いろいろおいしいものを食べた今回の旅行の中でも思い出に残る食事だった。仁寺銅、明銅ではヒョンジョンと腕を組んで買い物をした。韓国では夜中でもショッピングモールや屋台に活気があつた。ヒョンジョンの家でのホームステイでは、ご両親と時間が合わずお会いすることができず残念だったが、ふたりで朝ごはんを用意したことは私が目的としていた韓国の日常に少し触れることができてよかった。

時計の針は一定であるはずなのに、私が韓国で過ごした一週間は本当に楽しくて充実していた分、あっという間に過ぎてしまった。最初は韓国に着いたという実感が持てなかったが、それが送別会では明日帰国ということの前に韓国で過ごした一週間を整理するのが難しかった。たくさんのお出会いと出来事の中で多くのことを学び、得るものがあつたと確信している。今度カトリック大学校を訪れるときには、今回よりさらに関係を深めるために、もっと日本語を勉強するとともに韓国語も身につけておきたい。最後に私たちを心から迎え入れて下さった姜先生をはじめとするカトリック大学校の先生方、毎日研修院に泊まってサポートしてくれた学生の皆さん、またこのよ

うなすばらしい機会を与えて下さった沖先生に今一度感謝いたします。

## 韓国を訪れた感想

### 信州大学人文学部 2 年 矢嶋直子（日本語教育学専攻）

韓国を訪れたのは今回が初めてで、行く前はとても緊張していました。どんな風に迎え入れていただけるのか、また自分がどのように見られるのかとても不安でした。カトリック大学校の先生方、生徒の皆さんに本当に温かく迎えられ、二日、三日と経つうちにずっとここで過ごしているように安心してくつろげるようになっていました。それはなによりカトリック大学校の方々の細かい気配り、優しさが感じられる行動のおかげだったと感じます。

今回私が残念に思ったことは、自分がまったく韓国語を知らずに行ってしまったことでした。ほんの少しでも日本で勉強すべきだったととても反省しています。特にそれを強く感じたのはホームステイをしたときでした。ホームステイ先で本当に親切にさせていただいていろいろお礼を言いたいのに、お礼の言葉を一つしか知らないためとても歯がゆい思いをしました。この経験から文化だけでなく、その国の言葉を知ることがとても大事だと心から思いました。

先生方の授業を見学させていただいたことや、カトリック大学校の皆さんと触れ合う中で、現在自分の勉強していることがなぜ必要か、またどんなに大切かを学ぶことができました。本当は日本でもそれをわかってやっていたつもりだったのですが、日本語の意味などでうまく説明できなかったという体験をして、初めて実感できたように思います。それは私が今まで外国へ行き、国際交流というものをしたことがなかったためでもあり、実際に体験する必要を感じました。

たった一週間だったのですが、韓国にいる間や帰ってきてからも様々なことを感じ、考え、学ぶことができたように思います。また来年も行くつもりでいるのですが、今回仲良くなった人たちに恥ずかしくないよう変わるといいな、と思っています。『再会』の楽しみがあるということは、国際交流にとっても、また個人のつながりにも大切なことなので一生『再会』が続くような関係にしていきたいです。